

御講聞書の四弘誓願

若 杉 見 龍

一

本学学頭室住一妙先生は古稀を迎えるに当り、宗学者がいまだ余り研究の指を染めなかつた「御講聞書」の研鑽に傾倒せられ、既に「茂田井先生古稀記念 日蓮教学の諸問題」にその一端を発表せられたのみならず、ますます該研究にご精進せられ、本誌においても多年の考究の一部を漏らされる筈であり、筆者にも「御講聞書」の結びに当る四弘誓願に関する箇条について物するよう要請があつたので、ここに注釈的な一文を草した次第である。

二

「御講聞書」の結びは周知のように四弘誓願についての観心釈を示す三箇条よりなっている。四弘誓願を結びとしたのは宗門書としての体裁を整える上で尤もなことであり、本宗の朝昏の勤行も発願を以って、その結びとする。古来、本宗では発願について、次の二種がある。

その一は

未_レ度者令_レ度。未_レ解者令_レ解。未_レ安者令_レ安。未_二涅槃_一者令_レ得_二涅槃_一。であり

その二は

衆生無辺誓願度 煩惱無数誓願斷 法門無尽誓願知 仏道無上誓願成 である。

前者は言うまでもなく、法華経薬草喩品に見える所であり、^①後者は特に四弘誓願とよばれ、天台大師の創造する所といわれており、現在の日本仏教のたいていの宗派が勤行に際しての発願文としている。(但し文字に多少の相違は見られる。)

前者の思想的流れを見ると、長阿含経卷八に

瞿曇沙門能説^②菩提^①。自能調伏能調^③伏人^④。自得^⑤止息^⑥能止^⑦息人^⑧。自度^⑨彼岸^⑩能使^⑪人度^⑫。自得^⑬解脱^⑭能解^⑮解脱^⑯人^⑰。自得^⑱滅度^⑲能滅^⑳度人^㉑。

とあり、釈尊の自行と化他は調伏・止息・度彼岸・解脱・滅度にあることが説かれている。

また、雑阿含経卷第十三には

汝善学^①忍辱^②。汝今堪^③能於^④輪廬那^⑤一人間住止^⑥。汝今宜去度^⑦於未度^⑧。安^⑨於未安^⑩。未^⑪涅槃^⑫者令^⑬得^⑭涅槃^⑮。^⑯
と述べ、比丘の化他として、度・安・涅槃の三行が説かれている。

道行般若経卷第八 学品には^⑰

諸未度者悉当^⑱度^⑲之。諸未脱者悉当^⑳脱^㉑之。諸恐怖者悉当^㉒安^㉓之。諸未般泥洹者悉当^㉔令^㉕般泥洹^㉖。^㉗

といひ、度・脱・安・般泥洹せしめることが菩薩の学ぶべきこととされている。

これらを見ると、法華経薬草喩品の文は原始仏教以来の仏教者の一般的化他の流れの上にあるといえよう。^㉘

後者について類文を尋ねると

大乘本生心地観経卷第七 功德莊嚴品第九に

一切菩薩復有_二四願_一。成_二熟有情_一。住_三持三宝_一。經_三大劫海終不退轉_一。云何為_レ四。一者誓度_二一切衆生_一。二者誓斷_二一切煩惱_一。三者誓願_二一切法門_一。四誓証_二一切仏果_一。^⑦

と、菩薩の度・斷・願・証の四願を明し、

菩薩瓔珞本業経卷上には

一厚集_二一切善根_一。所謂四弘誓。未_レ度_三苦諦_一令_レ度_三苦諦_一。未_レ解_三集諦_一令_レ解_三集諦_一。未_レ安_三道諦_一令_レ安_三道諦_一。未_レ得_三涅槃_一令_レ得_三涅槃_一。^⑧

とあり、度・解・安・涅槃の四弘誓を苦・集・道・滅（涅槃）の四諦に配している。本乗本生心地観経は天台大師の示寂後に訳出されたのであるから、大師は恐らくこの瓔珞経から四弘誓願を創案せられたものであろう。道行般若経においては第三誓願を恐怖から安ぜしめるとしているが、この瓔珞経の説は道諦において安ぜしめるとしている点に大きい相違があるが、このことは注意すべきことであらう。

天台大師の撰述といわれる法界次第初門卷下之上 四弘誓願初門第四十一 に

一未_レ度者令_レ度。此弘誓縁_二苦諦_一而起。故_二纒絡経云_一。未_レ度_三苦諦_一。令_レ度_三苦諦_一。今明_レ苦者。即是生死也。生死有_二三種_一。一段段生死。謂_三六道衆生_一。所_レ稟陰入界身。果報既_レ飽。有_二形質分段之成壞_一也。二變易生死。謂_三羅漢辟支及大力菩薩_一。三種意生身。雖_レ無_二分段鹿報_一。猶有_二細微因転果移_一。變易生滅之所_レ遷也。若一切未_レ度_三三種生死_一者。菩薩発心。願_レ令_レ得_レ度。故云_三未度者令度_一。

二未_レ解者令_レ解。此弘誓縁_二集諦_一而起。故_二纒絡経云_一。未_レ解_三集諦_一。令_レ解_三集諦_一。今明_レ集者。即是煩惱潤_レ業。能招_二聚生死_一。^⑩煩惱潤_レ業有_二二種_一。一四住地煩惱。潤_二分段生死業_一。招_二聚分段生死苦果_一也。二無明住地煩惱。潤_二變易

生死業。能招^三聚^{*}變易生死苦果^二也。若一切未^レ解^三此二種集者。菩薩発心。願^レ令^レ得^レ解。故云未解者令解^一。

三未安者令安。此弘誓縁^三道諦^一而起。故^レ纒絡経云。未^レ安^三道諦^一。令^レ安^三道諦^一。今明即是能通^三涅槃之正助道^二也。有二種正助道^一。一偏縁^三真諦^一。修^三正助道^一。此道但得^レ至^三小乘^一。二正縁^三中道^一。修^三正助道^一。此道能到^三大乘^一。若一切未^レ安^三此二種道^一者者。菩薩発心。願^レ令^レ得^レ安。故云未安道者令安^一也。

四未涅槃者令得涅槃。此弘誓縁^三滅諦^一而起。故^レ纒絡経云。未^レ得^三滅諦^一。令^レ得^三滅諦^一。今明^三滅諦^一者。即是業煩惱滅。生死苦果滅也。有二種業煩惱生死^一。一段段生死業。四住地煩惱滅則分段生死苦果滅。即二乘所得滅諦也。二變易生死業。無明住地煩惱滅。即變易生死苦果滅。諸仏及大菩薩所^レ得。不共究竟滅諦也。若一切未^レ得^三此二種滅諦^一者。菩薩発心。願^レ令^レ得^レ滅。故云未^レ得^三涅槃^一者令^レ得^三涅槃^一。今四種弘誓所^レ縁四諦。与^三前声聞^一。有^三半滿異^一。前但明^三半字^一有作四聖諦^一。今明^三滿字^一無作四聖諦^一。所^三以二種四聖諦^一合明^三菩薩之道^一。教門不^レ同。若是三藏教通教。所^レ明弘誓。但縁^三有作四聖諦^一而起。若是別教圓教。所^レ明弘誓。通縁^三有作無作二種四聖諦^一而起。故約^三弘誓^一分^三別四諦^一。半滿異^二於前^一也。

とある。即ち天台大師は要路経を基として、それを敷衍したもののようである。第一の誓願は苦諦を縁じて起り、二種の生死、即ち分段と變易との苦を度せざる者をして度せしめんと願するをいい、第二の誓願は集諦を縁じて起り二種の集、即ち四住地と無明住地との煩惱を解せざる者をして解せしめんと願するをいい、第三の誓願は道諦を縁じて起り、二種の道、即ち偏真と中道との正助の道に安せざる者をして安せしめんと願するをいい、第四の誓願は滅諦を縁じて起り、二種の滅、即ち二乘所得の小涅槃と仏所得の大涅槃との滅を起さざる者をして得せしめんと願するをいうのである。また天台学では四種の四諦を説くが、この四種の四諦を縁じて起る四弘誓願にも亦藏通別円の区別が

あることになる。三藏經・通教に明す所の四弘誓願は有作の四諦を縁して起り、別教・円教に明す所の四弘誓願は有作・無作の二種の四諦を縁じて起るのである。更に天台大師は四諦と四弘誓願の関係を摩訶止観第一下に

又四諦中多約_レ解明_ニ上求下化_一。四弘中多約_レ願明_ニ上求下化_一。又四諦中通約_ニ三世仏_ニ明_ニ上求下化_一。四弘中多約_ニ未來仏_ニ明_ニ上求下化_一。又四諦中多約_ニ諸根_ニ明_ニ上求下化_一。四弘中專約_ニ意根_ニ明_ニ上求下化_一。¹⁶

と説いている。即ち四諦と四弘誓願とは何れも上求菩提下化衆生を明しているが、四諦は、解と三世仏と諸根に約し、四弘誓願は願と未來仏と意根に約すとするのである。

また、天台大師は空見よりして願を起すものとして次のようにも述べている。

摩訶止観第十下に

空見陰界是苦。十使等是集。念勉等是道。四倒破是滅。約_レ此起_レ誓。如_ニ一空見_一。一日一夜凡生_ニ幾許_ニ百千億陰_一。一一五陰即是衆生。日夜既爾。何況一世。何況無量世。空見既爾。余見亦然。能生之見既多。所生之陰則不_レ可_レ数。一人尚爾。何況多人。是為_ニ衆生無_レ邊誓願度_一。如_ニ一空見念念八十八使_一。余三見六十二等。亦八十八使。一人尚爾。何況多人。是名_ニ煩惱無量誓願斷_一。如_ニ一空見修_ニ念勉道品_一。余一切見正助之道無量無_レ邊。一人尚爾。多人亦然。是為_ニ法門無_レ盡誓願知_一。如_ニ一空見煩惱滅_一。無量見無量煩惱亦滅。一人既爾。諸人亦然。是名_ニ無上仏道誓願成_一。若衆生苦集是性実者則不_レ可_レ度。以下苦集從_ニ因縁_一生。無_レ有_ニ自性_一故。苦海可_レ乾。集源易_レ竭。故言_レ度耳。¹⁷

とあり、ここでも亦、四諦と四弘誓願を関係づけて説いているのである。

以上が天台大師の諸疏に見られる四弘誓願の主なるものである。大師以後の天台系の注疏の主たるものとしては溪荆尊者の止観大意に四弘誓願についての要約があるが、これは最初に挙げた法界次第初門の文の要約に近いので之を

略し、単に祖述しているものについてはこれ以上述べないことにする。⁽²⁰⁾ただ、元曉の兩卷無量壽經宗要と惠心の往生要集との四弘誓願についての注釈は「御講聞書」と関係があるので、次に之を挙げよう。

兩卷無量壽經宗要 には

三者。以三至誠心。願生彼國。此願前行和合為因。此就菩薩種人。也。經說如是。今此文略辨其生相。於中有二。先明正因。後顯助因。經所言正因。謂菩提心。言發無上菩提心者。不願世間富樂。及与涅槃。一向志願三身菩提。是名無上菩提之心。總標雖於於中有二。一者。隨事發心。二者。順理發心。言隨事者。煩惱無數。願悉斷之。善法無量。願悉修之。衆生無辺。願悉度之。於此三事。決定期願。初是如來斷德正因。次是如來智德正因。第三心者恩德正因。三德合為無上菩提之果。即是三心。總為無上菩提之因。因果雖異。広長量齊。等無所遺。無不包故。如經言。發心畢竟無別。如是二心前心雖。自未得度先度他。是故我礼初發心。此心果報。雖是菩提。而其華報。在於淨土。所以然者。菩提心量。廣大無辺。長遠無限。故能感得廣大無際依報淨土。長遠無量正報壽命。除菩提心。無能當彼。故說此心。為彼正因。是明隨事發心相也。所言順理而發心者。信解諸法皆如幻夢。非有非無。離言絕慮。依此信解。發廣大心。雖不見有煩惱善法。而不撥無可斷可修。是故雖願悉斷悉修。而不違於無願三昧。雖願皆度無量有情。而不存能度所度。故能順隨於空無相。如經言。如是滅度無量衆生。實無衆生得滅度者。乃至広説故。如是發心。不可思議。是明順理發心相也。⁽²¹⁾

と述べている。長文なので、その要点を記せば、四弘誓願の心を発するに隨事と順理の二別がある。隨事とは煩惱無數なるも悉く之を断せんと願い、善法無量なるも悉く之を修せんと願い、衆生無辺なるも悉く之を度せんと願う。

初めは如来断徳の正因、次は如来智徳の正因、第三心は恩徳の正因である。三徳を合せて無上菩提の果とし、この三心を総して無上菩提の因とする。順理とは諸法は皆幻夢の如く、有に非ず無に非ず、言を離れ慮を絶すると信解し、この信解によって、広大の心を発するをいう。煩惱と善法の別あるを見ないと雖も、しかも可断可修を撥無せず、悉く断じ悉く修せんと願うも、無願三昧にたがわず、無量の有情を度せんと願ずるも、能度と所度を存せず、故によく空無相に随順する。經に言うが如く、無量の衆生を滅度せしめるも、実に衆生の滅度を得る者が無い。この故に、このような発心は思議すべからず、これが順理発心の相である。と、

このように宗要は発心に随事と順理の二別のあることを説いているが、之を更に広説したのが往生要集であるので往生要集について述べよう。

往生要集 卷上 に

三料簡。初行相者。総謂レ之願作仏心。亦名ニ上求菩提下化衆生心。別謂レ之四弘誓願。此有三二種。一縁レ事四弘願。是即衆生縁慈。或復法縁慈也。二縁レ理四弘。は無縁慈悲也。言ニ縁レ事四弘者。一衆生無辺誓願度。応レ念一切衆生悉有ニ仏性。我皆令レ入ニ無余涅槃。此心即是饒益有情戒。亦是恩徳心。亦是縁因仏性。応身菩提因。二煩惱無辺誓願断。此是摂律儀戒。亦是断徳心。亦是正因仏性。法身菩提因。三法門無尽誓願知。此是摂善法戒。亦是智徳心。亦是了因仏性。報身菩提因。四無上菩提誓願証。此是願ニ求仏果菩提。謂由ニ具ニ足前三行相。証ニ得三身圓滿菩提。還亦広度ニ一切衆生。二縁レ理願者。一切諸法本來寂靜。非レ有非レ無非レ常非レ断。不レ生不レ滅不レ垢不レ淨。一色一香無レ非ニ中道。生死即涅槃。煩惱即菩提。翻ニ一塵勞門。即是八万四千諸波羅蜜。無明變為レ明。如ニ融レ水成レ水。更非ニ遺物。不ニ余処来。但一念心普皆具足。如ニ如意珠非レ有レ宝非レ無レ宝。若謂レ無者即妄語。若謂レ有者即邪見。

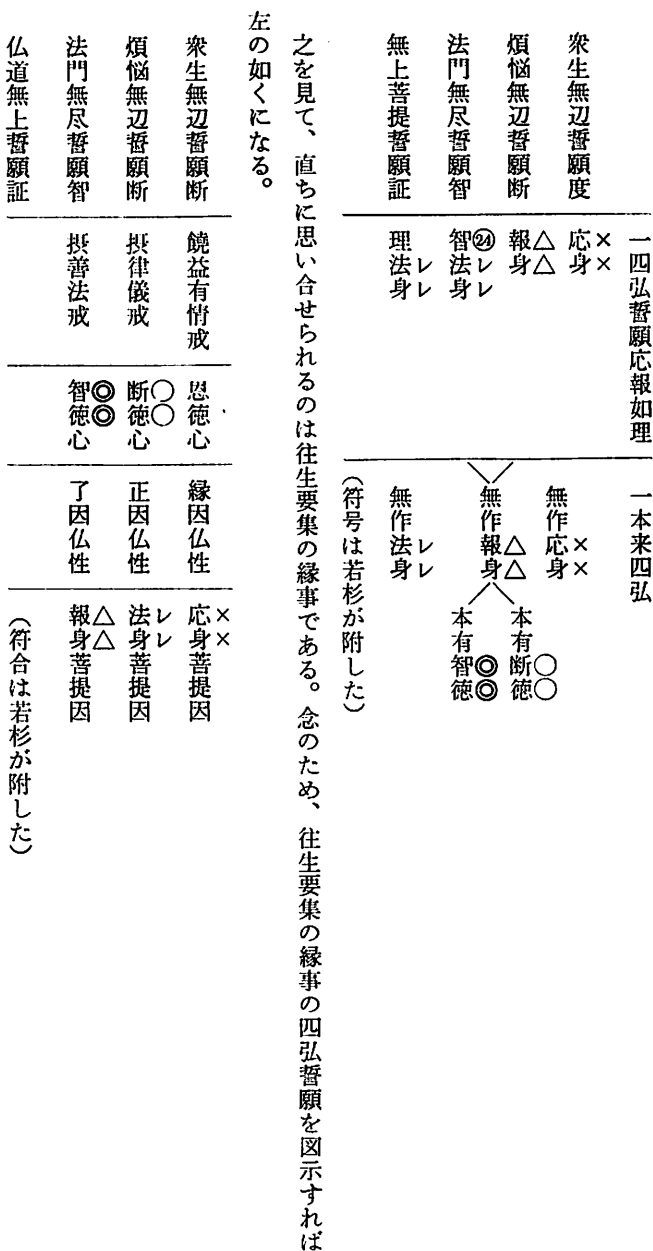
不_レ可_二以_レ心知_一。不_レ可_二以_レ言辯_一。衆生於_二此不思議不縛法中_一。而思想作_レ縛。於_二無脫法中_一。而求_二於脫_一。是故普於_二法界一切衆生_一。起_二大慈悲_一興_二四弘誓_一。是名_二順理発心_一。是最上菩提心。^②

とある。即ち往生要集では宗要の隨事、順理の二種の発心を縁事の四弘・縁理の四弘と名づける。縁事の四弘とは一に衆生無辺誓願度の心は饒益有情戒、恩徳の心・縁因仏性・応身菩提の因であり、二に煩惱無辺誓願断は摂律儀戒・断徳の心・正因仏性・法身菩提の因であり、三に法門無尽誓願知は摂善法戒・智徳の心・了因仏性・報身菩提の因であり、四に無上菩提誓願証は仏果菩提を願求し、前三行相を具足するに由つて、三身円満の菩提を証得し、一切衆生を度するをいう。縁理の四弘とは、一切諸法は本来寂靜にして有に非ず無に非ず、生死即涅槃、煩惱即菩提である。一一の塵勞門を翻せば、即ち是八万四千の諸波羅蜜であり、無明変じて明となること、氷を融じて水となすが如きである。衆生は此の不思議不縛の法において、しかも思想して縛をなし、無脱の法においてしかも脱を求む。是の故に普く法界の一切衆生において大慈悲を起し、四弘誓願を興するのである。是を順理発心と名づけ、是れ最上の菩提心であると説いている。

三

御講聞書においては末尾の三条^③において、四弘誓願の観心釈を述べている。即ち、一入末法四弘誓願においては、末法における四弘誓願とは神力品の最末句の於我滅度後応受持斯經是人於仏道決定無有疑の文であるとし、四弘誓願をこの経文に配当している。一四弘誓願応報如理云事においては四弘誓願の文に応身・報身・智法身・理法身の三(四)身をそれぞれに配し、誓願というのは題目弘通の誓願なりと釈している。一本末四弘事においては無作の応身を衆生無辺誓願度に配し、煩惱無辺誓願断を無作の報身の本有の断徳と定め、法門無尽誓願智を無作の報身の本有の

智徳とし、無上菩提誓願証を無作の法身に配している。詮ずる所、四弘誓願は一念三千なりとし、四弘の弘は上行所伝の南無妙法蓮華經とする。一四弘誓願応報如理と一本来四弘における四弘誓願の關係は些か煩雜なので、之を圖示すれば左のようになる。



之を見て、直ちに思い合せられるのは往生要集の縁事である。念のため、往生要集の縁事の四弘誓願を圖示すれば左の如くなる。

(符合は若杉が附した)

両図を比較して見ると、往要集は第一・第二・第三願を如来の三徳心に配しているが、御講聞書では第一願に恩徳心を欠いてはいるが、第二・第三願では同じであり、如来の三身の配当では少異はあるが、両者が関係を有していることは肯けるであろう。

また、一入末法四弘誓願の中に

煩惱無辺ナレドモ 煩惱即菩提生死即涅槃體達。仏道入煩惱更ナシ。

とあるが、これは往生要集の縁理の四弘の文中に、

一色一香無非中道。生死即涅槃。煩惱即菩提。翻一一座旁門。即是八万四千諸波羅蜜。

等とあるのを想見するに充分であろう。

このように往生要集と御講聞書の四弘誓願を比較対照して見た場合、四弘誓願に関していえば、御講聞書は往生要集と深い関連の上に成立したと言つてよいであろう。

御講聞書の最末の一本末四弘事の中に

サテ四弘弘何物。所謂上行所伝南無妙法蓮華経也。釈云、四弘能所泯云々。此釈止観前三教釈。能云如来也。所者衆生也。能所各別権教故也法華経心能所一體也。泯云権教心機法共一同。能所泯云也。アエテ能所一同成仏所泯云非也。

の文がある。この中の「釈云、四弘能所泯云云。」の出典であるが、「釈」というからには、何かの注釈書であろうが、天台関係の典籍においては遂にそれらしいものを捜し出すことはできなかった。しかしながら「此釈止観前三

教積^{ツキセリ}。能云^{トハ}如来也。所者^{トハ}衆生也。能所各別^{スベクハ}權教也。」の文は

止觀輔行伝弘決卷第一の四の

觀^ニ諸土相^ニ上求下化。国土是所依生仏是能依。生仏相望故得^ニ亦具^ニ四弘誓^{一也}。⁽²⁵⁾

によつたものではなからうか。即ち弘決の「生仏相望」を「能所各別」とみ、「能所各別」は權教の分際であるから「止觀前三教積。」としたのであろう。しかして、法華は純円であるから生仏一如であり、ここを指して「法華経、心能所一體也。」と説いたものであろう。

註

① 正藏 九卷一九頁中

② 正藏 一卷四九頁上

③ 正藏 二卷八九頁下

④ 望月仏教大辞典に貢高品とあるのは誤りである。

⑤ 正藏 八卷四六五頁下

⑥ 訳語上のみの比較では不充分であるが、本稿はこれらの追求が目的ではないので、これ以上の検討は加えないことにする。

⑦ 正藏 三卷三二五頁中

⑧ 正藏 二四卷一〇一三頁上

⑨ 異本は嬰珞とある。以下同じ

⑩ 異本は集。以下同じ

⑪ 異本は明十道諦である。

⑫ 異本は是である。

⑬ 異本は道がない。

⑭ 異本は及である。

⑮ 正藏 四六卷六八五頁下——六八六頁上

- ⑯ 正蔵 四六卷八頁上
 ⑰ 正蔵 四六卷一三九頁中
 ⑱ 正蔵 四六卷四五九頁中
 ⑲ 止観大意は摩訶止観第一卷にあげられている四弘誓願についての要約のように述べているが、内容は法界次第初門の方に近い。
 ⑳ 本邦の尊辨述の摩訶止観見聞添註第一之坤(旧版日仏全・二九卷一〇八頁下)には四教の菩薩の四弘誓願が述べられているが、「御講聞書」の四弘誓願とはあまり関係がないようであるから省略する。
- ㉑ 正蔵 三七卷一二八頁中―下
 ㉒ 正蔵 八四卷四八頁下
 ㉓ 昭和定本第三卷二五九四頁以下
 ㉔ 異本には 智の字なし
 ㉕ 正蔵 四六卷一七〇頁上